

『作法集』所収『引導作法』の基礎

山 本 隆 信

はじめに 真言宗における引導法

『作法集』所収『引導作法』の基礎

日本仏教はしばしば葬式仏教といわれる。しかし、いつから葬儀が仏式で一般に行なわれるようになったのか、史料が少ないためにあまりよくわかっていない。先行研究^①によれば、一般人が葬儀を仏式で行なうようになったのは、鎌倉時代以降のことであり、その担い手は、真言律、浄土、禪の遁世僧・念仏僧たちから興ったものであるらしい。それ以前に平安期から中世初期にかけて、真言僧は天皇家・貴族の葬儀を主として行なっていたが、祈祷・修行・神事に際して死穢を忌避するという立場から、葬式に対して否定的、曖昧な態度をとるようになったとされる。真言僧が一般の檀家のために葬式を行なうようになったのは、近世になってからと考えられている。引導法の資料としては、空海御作と伝わる引導法があるが「後世の偽作」^②とされ、覚鑿撰述とされる引導法も、後述するように資料の正当性は確証できない。成賢（一二六三）の『作法集』には『葬法』と『亡者曳覆書様』の

二帖があり、ともに仁海記と伝えるので、真言宗では小野の仁海（九五—一〇四六）の頃から葬法に関わるようになったとされるが、^③実際に現在の真言宗で広く流布している引導法は「野沢の法流には相伝されていない」^④ものであり、資料としてはほぼ近世のものである。

なぜ近世に引導法の資料が成立したのか。江戸時代に入ってから、仏教各宗は幕府の宗教統制政策を受けて、檀家制度・寺請制度・本末制度を整備していった。日本人の宗教が仏教によって管理されるに伴い、寺院では現在の戸籍に当たる宗門人別帳が作成され、葬儀・法要は仏式で行なわれることが一般化し、各家には仏壇が置かれ、法要の際には僧侶を招くという慣習が広まった。江戸時代に庶民の葬儀は華美に行なわれ、たびたび江戸幕府は庶民の葬礼・仏事等を質素にすべきことを命じている。^⑤寺院は、檀信徒からの社会的要請として葬儀の執行者たるべく期待された。真言僧の方も、檀信徒の葬儀に際して引導という役割を担ううえで、真言宗における引導法はいかなるものであるべきかという新しい問題に直面したはずである。しかるに引導法の典拠が所依の聖典に見出されないとすれば、温故知新の精神を発揮して、諸種の聖教・作法・儀軌・次第等を参照して引導法を編集する必要がある。このようにして各宗派の引導法は江戸中期以降に成立していった。^⑥引導法には近世の先徳たちの創意工夫と意匠を見いだすことができる。

智山伝法院では、平成二十七年（二〇一五）より『作法集』研究会を行なっている。研究会の目的と経緯、および現行『作法集』（以下『作法集』）の成立については小宮俊海「二〇一七」論文に尽くされているのでそこらを参照されたい。^⑦本研究会の成果は『智山伝法院選書』第十八号として発刊予定であるが、本論文では『作法集』所収『引導作法』（以下『引導作法』）^⑧の基礎的研究として、真言宗における引導法の成立と比較、『引導作法』所収の経文・印明の出典からうかがえる基盤思想について論じていきたい。

『引導作法』の成立

現行の『引導作法』は、智山第十四世智興（二六六）⁹から第十五世亮範（二七三）⁹へ伝えられたものであり、歴史的には江戸時代中期・十八世紀初頭に成立した文献である。事相聖教類のなかでも成立的には新しいものであるといえよう。この時代までは範とすべき引導法が智山にはなかったということになるが、なぜ智興によってお墨付きを得られた『引導作法』が広く用いられるようになったのであろうか。その背景を類推すれば、この頃には本末関係が確立し、地方談林が整備されて自立した活動が可能になり、末寺は総本山の権威を望みつつも、地方における寺院活動を優先して、総本山における役務を金納によって代替するという常態が生じていた。¹⁰ 地方末寺は総本山によって公認された引導法を用いることによって確信と権威をもって葬儀を営むことができ、総本山は地方末寺に権威を付与して、末寺に自由で柔軟な活動を条件付きで承認することによって、末寺から財を得ている。中央と地方の互酬関係が出来し、宗派全体が隆盛していった時代に『引導作法』は成立している。

智山における引導法に関して、高井観海（二八八）¹¹『密教事相大系』¹¹は、三種の引導法について詳細な解説を加えている。覚鏝（二〇九）¹²「引導大事（引導秘法）」¹²、動潮（二七〇）¹³「秘密引導作法（引導略作法）」¹³、『引導作法』の三種であり、これらは師資相承によって瑜伽教如（二九四）¹⁴から高井観海へと付法されたものであり、智山における引導法の基準となるものといえる。これらの引導法はおの所の伝が異なっている。また智山書庫には、各種の引導法が残されており、様々な所伝があったことが知られる。さらには智山で重視される隆誓（二六五）¹⁵輯『諸大事十結』（以下『十結』）第九結に各種の引導法を収める。『十結』には自ら注釈を施した『諸大事口決』二巻がある。およそ上記の文献群を智山における引導法の資料として扱う。

『作法集』では『引導作法』と『秘密引導作法』の二種を挙げるが、これらはいわば広略の関係にあるとされ、伴僧・助衆の有無により使い分けるのが一般的とされる。『秘密引導作法』は略作法であるが、動潮が宝暦七年（一七五七）に醍醐寺で洞泉律師性善（^{七六三}）から授かったものであり、実際の葬儀では多く用いられる。智山派における事相法流が動潮の相承系譜を主流としながらも、引導法に関しては傍流の隆誓の所伝を尊び、さらに高野山の引導法が三宝院流に属するために、それをも参照するという混み入った状況がある。引導法に関しては複線的な相承が行なわれ、それらの所伝を任意に取捨選択していたものと思われる。

いずれにせよ、真言宗における引導法はすべて即身成仏を基調としており、亡者を加持して秘印明を授けて成仏させることを主目的としているから、本論文では法流や所伝にこだわらず、その意を取って所説の内容に焦点を当てて総体的に論じてみたい。

古義・豊山・智山の引導法の比較

古義・豊山・智山の引導法は、亡者に灌頂を授けることを目的としている点は共通しているが、それぞれに特色がある。以下に各々の引導法の概要を述べて、その項目を対照してみたい。⁽¹⁶⁾

古義の引導法については、佐藤隆彦「二〇一五」に諸流派の引導法と、従来の研究史が批判的に網羅されている。高野山真言宗で現在用いられている引導法は、『二卷書』下巻収録の『引導略作法』である。⁽¹⁷⁾これは江戸初期・貞享三年（一六八六）までに成立したものとされ、全文が『福田殖種纂要』⁽¹⁸⁾に引用される。内容は智山・豊山に伝わる引導法とはかなり異なっている。葬儀作法と野辺作法の二段構えで、野辺作法において亡者に灌頂・血脈を授けている。

『作法集』所収『引導作法』の基礎

高野山『二巻書』『引導略作法』		豊山『作法集』『引導作法』		智山『作法集』『引導作法』	
〔引導略作法〕		〔野辺作法〕		①至靈前取香呂	
				②登礼盤	
				③焼香	
		①焼香		④塗香	
①三密観				⑤護身法	
②浄三業・三部・被甲		③護身法			

豊山派で現在用いられている引導法は、覺錢『引導次第』⁽¹⁹⁾に依拠している。覺錢作とされるが、資料の正当性は確証しがたい。⁽²⁰⁾現在の引導法は、大正十三年に真言宗豊山派が発行した『作法集』に所収される。⁽²¹⁾豊山派の『作法集』は、智山派の『作法集』(昭和三十一年初版)に先駆けてかなり早く編纂され、近代になって大伝法院流が豊山派の根本法流として定められて整備されたものである。豊山派の引導法は、高野山・智山と比べると項目が少なく、かなりシンプルな内容である。授戒・戒名・灌頂・印可・血脈授与という次第の流れは、得度・伝法・灌頂の構成を枠組としている。

智山派の『引導作法』は一座行法の次第という体裁をとる。道場を浄めた後、亡者に授戒・秘印明・灌頂・血脈を授けて、大日如来より連綿と続く法脈を証明し、さらに念入りに亡者を阿弥陀・地藏・不動・滅悪趣尊等の諸尊に帰依させて、悟りの世界に帰入することを願うものである。古義・豊山・智山の三者を対照してみよう。

								⑤普賢三昧耶印	④授菩提心戒印明					③加持香水
③⑧大師御引導大事・智拳印	④①授六大之印明						③④破地獄印明	③⑥授三昧耶戒	③⑤授菩提心戒					③③加持香水
	⑬③六大印言				⑩灌頂	⑨仏眼仏母印言	⑧破地獄印言	⑦三昧耶戒真言	⑥發菩提心真言	⑤淨土變（三婦依）真言	④授戒・唱戒名			③加持香水・灑水
⑮頌文	⑭亡者五大加持	⑬大金剛輪印明	⑫住法界定印	⑪持戒清淨大事					⑮⑧發菩提心印	⑨三婦	⑧懺悔文	⑩授五戒（或八戒十戒）	⑦結界・不動三種印明 ・降三世	⑥灑淨

①七法身印	②不動灌頂印	③普賢三昧耶印 (ॐ ॐ ॐ)	④開塔印 (ॐ ॐ ॐ)	⑤開塔印 (ॐ ॐ ॐ)	⑥三身如來說法印	⑦不動四大天王印	⑧六地藏總印	⑨同來迎印 (光明真言)	⑩三尊來迎印 (光明真言)	⑪彌陀來迎印	⑫外五鈎印				⑬六地藏惣印
								⑭最極秘印等	⑮光明真言、 ⑯祈願等、						
								⑰光明真言				⑱如來拳印	⑲滅惡趣尊印明	⑳不動印	㉑地藏尊印明

『作法集』所収『引導作法』の基礎

②⑧ 教化	②⑦ 仏名	②⑥ 神分	②⑤ 表白	②④ 三礼					②③ 色身不二成仏印	②② 心法成仏印	②① 色法成仏印	②① 不動六道印	①⑨ 応身印	①⑧ 報身印
						①⑨ 廻向	①⑧ 焼香							
				③⑤ 下礼盤	③④ 三部被甲等		③③ 撥遣							

②9 読経、③0 列次第等	④3 読経、④4 理趣経、④5 尊勝陀羅尼、④7 讃廻向、④8 九條錫杖		
③2 六観音惣印			

右記の引導法・全七十一項目中のシンクロ率は低く、高野山の引導法が豊山・智山と共通する項目はわずかに五項目である（ただし野辺作法まで含めれば、菩提心戒・三昧耶戒・六大印明・灌頂印明・大師御引導大事（智拳印）・血脈等の重要な印明・作法が共通する）。豊山の共通項目は十六項目、智山の共通項目は十九項目であり、豊山と智山の親近性が比較的に高いことを伺うことができる。共通するパターンには、高野山と豊山、高野山と智山、豊山と智山、三者すべてに共通するという四通りがあつて、それらは都合二十一項目である。三者すべてに共通する項目が、真言宗の引導法において特に重要なものであると考えられる。それらは、護身法・加持香水・発菩提心戒・六大印明・五字明・灌頂秘印明・血脈である。すなわち真言宗の引導法の骨子は、得度・灌頂儀礼に用いられる各種の印明・事作法を中心に収集して構成されていると言える。さらに智山の引導法は、三者に共通する基本的な事作法に加えて、滅罪・往生に縁の深い本尊である阿弥陀・地藏・不動・滅惡趣尊等の印明によつて、念入りに亡者の引導を祈念する構成となっている。いずれも真言宗の引導法は、亡者に灌頂・血脈を授けることが眼目である。

『引導作法』の基礎——得度・灌頂儀礼として

真言宗における引導法の目的は「即身成仏」であり、その目的に向かつて受戒作僧、伝法灌頂を模して作法の

『作法集』所収『引導作法』の基礎

智山『作法集』『引導作法』		対応する諸作法
①至靈前取香呂		①②③④⑤までは行法中の一連の作法である。
②登礼盤・三礼・如来唄		「出家受戒作法」中「三礼・如来唄」
③焼香		「伝法灌頂作法」中「誦經導師法則」
④塗香		
⑤護身法		
⑥灑淨		「出家受戒作法」中「洒淨」、「三昧耶戒作法」中「加持香水」
⑦結界・不動三種印明 ・降三世		「三昧耶戒」中「慈救呪」 「三昧耶戒」中「降三世大呪」
⑧懺悔文		「出家受戒作法」中「懺悔」
⑨三帰		「出家受戒作法」中「正受」
⑩授五戒（或八戒十戒）		「出家受戒作法」中「説戒相」
⑪持戒清淨大事		

ユニットが構成され、亡者を引導し成仏させる一連の儀式が成立している。灌頂儀礼に模しているとはいえ、灌頂儀礼は三昧耶戒・初夜・後夜作法という複雑な体系があり、引導法の構成は灌頂儀礼の骨子のみである。『引導作法』と出家受戒作法・伝法灌頂諸作法の対応を挙げれば以下になる。²²⁾

②住法界定印	
⑬大金剛輪印明	
⑭亡者五大加持	
⑮頌文	
⑯同印 五字明	
⑰金剛合掌	
⑱梵菩提心印	
⑲授五鉗	「伝法灌頂作法」中「小壇所作法・五鉗」
⑳秘印明・金剛界普賢三昧耶印 ・胎藏界入仏三昧耶印	
㉑伝法灌頂秘印・金剛界大率都婆印	「伝法灌頂作法」中「小壇所作法・印可」
・胎藏界外五鉗印	「伝法灌頂作法」中「小壇所作法・印可」
㉒阿闍梨位印（印相は三部阿闍梨印）	「三昧耶戒」中「阿闍梨位印明」（印相は五部印）
㉓第二重秘印明	
㉔第三重秘印明	
㉕瑜祇秘印明	
㉖授血脈	「三昧耶戒」中「阿闍梨表白」

『作法集』所収『引導作法』の基礎

②7 弥陀印明	
②8 地藏尊印明	
②9 不動印	
③0 滅惡趣尊印明	
③1 如来拳印	
③2 光明真言	
③3 撥遣	
③4 三部被甲等	行法中の一連の作法である。
③5 下礼盤	

——『引導作法』は一座行法の形式をとるが、作法のユニットは「出家受戒作法」や「伝法灌頂作法」に基づくものと考えられる。行法中の一連の作法、三礼・如来唄、灑浄は、「出家受戒作法」と「伝法灌頂作法」の双方に見られ、懺悔文、三帰、授戒は「出家受戒作法」に見られる。授戒までの前半部分の諸作法は「出家授戒作法」に則るものと考えられよう。僧としての修行が生前にはかなわない者のために、「没後作僧」を行ない、得度授戒させて、灌頂する。それによって、亡者は即身成仏して、僧・仏子・仏となり、生者を見守る存在となるのである。

右表の対応する諸作法のうち、とくに「伝法灌頂作法」において特徴的な作法は、授五鉢、伝法灌頂秘印、授血脈である。このうち血脈・秘印について『諸大事口決』が端的に解説しているので、それを見てみよう。

△次に血脈・秘印明等、之を授く

血脈はたやす輒く人に授け難き事なり。是れ一流の法流の血脈なる故に、法流一流を相伝せざる人に血脈の伝持有るべからず。若し法流を伝受したる人、伝える所の血脈を用いて、我が実名の次に亡者の戒名を入れ、之を唱え授くべし。若し法流を伝授せざる人ならば、伝法灌頂を受けし時、阿闍梨に従って伝授する所の紹文に依つて、我が実名の次に亡者の戒名を入れて唱え授くべし。凡そ血脈を授くる事は師資累代して、秘密印璽を相承するなり。付法血脈の人は皆な是れ即身成仏の人なる故に、今、引導する所の亡者も既に秘密の印璽を伝授する故に即身成仏の人数に列するなり。此の観念に住して唱え授くべし。²³

——真言宗の引導法は、亡者に秘印明を授けて成仏させるのが目的である。導師はすでに伝法灌頂において秘印明を授かり、血脈を受け、即身成仏した阿闍梨であり、亡者はその秘密印璽を継承する弟子である。葬儀という人生終局の厳肅なる場面において、得度と灌頂という莊嚴なる儀式が再現され、阿闍梨たる導師は自ら受けた血脈と秘印明を、弟子たる亡者へと伝授する。『諸大事口決』は、大日如来から連綿と相承されてきた真言の付法の系譜に連なることを「即身成仏の人数に列する」と表現している。葬儀において導師は、亡者もまた真言宗の系譜に列なつて即身成仏する存在であると観念して、秘印明・血脈をあたかも現前に生けるがごとく亡者に唱えて授けるべきなのである。

『引導作法』の典故からみる基盤思想

『引導作法』は、種々の經典・儀軌・次第から引導に適した經文・真言を抜き出して構成・編集されている。ここで『引導作法』の引用典籍について整理してみよう。すでに『智山の真言』シリーズに言及されているものは

その頁数と項目名を記しておく。以下の通りである。

『引導作法』項目		出典
①普礼真言		『智山の真言』一八頁《普礼真言》
②三礼		『大方広仏華嚴經』(大正蔵九・四三〇下)
③如来唱		『勝鬘師子吼一乘大方便方広經』(大正蔵一二・二一七上)
⑤護身法		『智山の真言』一九頁以降
⑥灑淨		『智山の真言』四九頁《軍荼利明王》、『智山の真言②』三一頁《加持香水》
らんばん加持		『智山の真言②』三二頁《覽鏝加持》
⑦結界・不動三種印明		『智山の真言③』一〇三頁《不動》、『智山の真言』四五頁《不動明王慈救呪》、『智山の真言③』二六頁《加持香水》
・降三世		『智山の真言②』一〇〇頁《降三世》
⑧懺悔文		『大方広仏華嚴經』(大正蔵一〇・八四七上)
⑨三帰		『智山の真言②』一六五頁《道場観(本尊観)》、『智山の真言③』七八頁《地神持次第》
⑪持戒清浄大事		『観自在菩薩隨心呪經』(大正蔵二〇・四五九上)、『観自在菩薩恒嚩多唎隨心陀羅尼經』(大正蔵二〇・四六五上)
⑬大金剛輪印明		『智山の真言』二〇〇頁《大金剛輪陀羅尼》、『智山の真言②』八三頁《大金剛輪》

⑭亡者五大加持	『大日經』「悉地出現品」(大正藏一八・二〇中)、「秘密曼荼羅品」(大正藏一八・三一上)、「阿闍梨真実智品」(大正藏一八・三八中)、「要略念誦經」(大正藏一八・六一中)、「撰大軌」(大正藏一八・八三下、九〇中)、「広大軌」(大正藏一八・九一下)、「玄法軌」(大正藏一八・一一〇中)、「青龍寺儀軌」(大正藏一八・一四六中)、「胎藏梵字次第」(弘全二・二五一)
⑮頌文1 (八葉白蓮…)	『金剛頂經瑜伽修習毘盧遮那三摩地法』(大正藏一八・三二八中)、「念誦結護法普通諸部」(大正藏一八・九〇七下)、「菩提心論」(大正藏三二・五七四中)
頌文2 (不捨於比身…)	『大日經』「悉地出現品」(大正藏一八・二一上)
⑯同印 五字明	『智山の真言』四一頁《胎藏大日如來》、「智山の真言②」二九四頁《胎藏界大日》、「智山の真言③」九四頁《滿足一切智々印》
⑰金剛合掌	『守護国界主陀羅尼經』(大正藏一九・五七〇下)
⑱発菩提心印	『智山の真言』二九頁《発菩提心真言》、「智山の真言②」六八頁《発菩提心》、一二二頁《修菩提心》、「智山の真言③」四四頁《発菩提心方便》
⑲授五鉈	『撰大軌』(大正藏一八・八二上)、「阿闍梨大曼荼羅灌頂儀軌」(大正藏一八・一九一中)、「金剛頂經」(大正藏一八・二一九上、三五四中)、「金剛頂瑜伽中略出念誦經」(大正藏一八・二五一下)
⑳秘印明 ・金剛界普賢三昧耶印	『智山の真言』三〇頁《三昧耶戒真言》・二〇九頁《普賢菩薩》、「智山の真言②」六九頁《三昧耶戒》・九七頁《普賢三昧耶》

・胎藏界入仏三昧耶印	『智山の真言』一四九頁《入仏三昧耶真言》、『智山の真言③』三三頁《入仏三昧耶印真言》
②1 伝法灌頂秘印 ・金剛界大率都婆印	『大日經』(大正蔵一八・二三下、四八上、四九中)、『要略念誦經』(大正蔵一八・五七中、五九中、六一中、六三上)、『撰大軌』(大正蔵一八・六七中)、『広大軌』(大正蔵一八・九二下)
・胎藏界外五鈷印	前項⑩《五字明》参照
②2 阿闍梨位印	『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』(大正蔵一八・二五六上)
②7 弥陀印明	『智山の真言』一九二頁《弥陀大呪》
②8 地藏尊印明	『智山の真言』六四頁《地藏菩薩》、『智山の真言③』一一一頁《地藏菩薩》
②9 不動印	前項⑦《結界》参照
③0 滅惡趣尊印明	『大日經』(大正蔵一八・一六下、二七中)、『撰大軌』(大正蔵一八・七四上)、『広大軌』(大正蔵一八・一〇一下)、『玄法軌』(大正蔵一八・一一七上、一三四下)、『青龍寺儀軌』(大正蔵一八・一五五中)、『胎藏梵字真言』(大正蔵一八・二七〇中)、『大日經疏』(大正蔵三九・七一九中)
③1 如来拳印	『智山の真言』一九頁《三密觀》、『智山の真言②』二五頁《三密觀》、『智山の真言③』一二二頁《三密觀》
③2 光明真言	『智山の真言』三三頁《光明真言》

③③撥遣

『大日如来剑印』（大正蔵一八・一九六上、二〇〇下）、『諸仏境界撰真実経』（大正蔵一八・二八四中）、『金剛頂一切如来真実撰大乘現証大教王経』（大正蔵一八・三三二上）、『仏頂尊勝陀羅尼念誦儀軌法』（大正蔵一九・三六八上）、『慈氏菩薩略修愈識念誦法』（大正蔵二〇・五九四中）、『無量寿仏化身大忿迅俱摩羅金剛念誦瑜伽儀軌法』（大正蔵二一・一三二下）、『大黒天神法』（大正蔵二一・三五七中）、『施諸餓鬼飲食及水法』（大正蔵二一・四六八上）、『瑜伽集要救阿難陀羅尼焰口軌儀経』（大正蔵二二・四七二上）

③④三部被甲等

『智山の真言』一二二頁以下

——以上、『引導作法』における出典を網羅的に列挙した。これらの結果を、出典多数の場合は一項目につき二つの典拠まで絞ったうえで、その出典を上位順に並べれば次頁のようになる。

これらの文献をもつて『引導作法』の出典を網羅することができた。ここには江戸期の智山の学匠が、智山における引導法がどうあるべきかを考えて、その編集に際して参照した文献群が示唆されている。『引導作法』の出典の過半数が『大日経』、『金剛頂経』、及びその供養儀軌類によって占められている。『引導作法』が「伝法灌頂作法」を模していることとされる通り、大部分が両部大経を本拠として構成されていることがわかる。『引導作法』の基盤思想は、両部大経を中心として、『華嚴経』、『勝鬘経』という大乘經典、種々の密教經典・儀軌・論書の核心部分をまとめて成立しているというべきであろう。

『大日經』……………①⑥⑦⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔
 『金剛頂經』……………①⑥⑦⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔
 『大日如來劍印』……………⑥⑬⑳㉑
 『華嚴經』……………②⑧
 『金剛頂瑜伽中略出念誦經』……………⑤⑳㉑
 『蘇悉地羯羅供養法』……………⑤⑳㉑
 『十八契印』……………⑤⑳㉑
 『撰大軌』……………⑬⑱
 『玄法軌』……………⑦⑨
 『勝鬘經』……………③
 『蓮華部念誦法門』……………⑥
 『觀自在菩薩隨心呪經』……………⑪
 『毘盧遮那三摩地法』……………⑮
 『菩提心論』……………⑮
 『守護国界主陀羅尼經』……………⑰
 『金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經』……………㉒
 『無量壽如來觀行供養儀軌』……………㉗
 『不空羼索神變真言經』……………㉘



まとめ

真言宗における引導法、その資料と成り立ちについて概観した。高野・豊山・智山の三者の引導法を比較対照することによって、真言宗の引導法は三様であるが、その骨子は、いずれも亡者に秘印明を授けて即身成仏させることを目的としている。

『引導作法』の基礎は、得度・灌頂儀礼の諸作法のユニットに範を得ている。灌頂儀礼を象徴するものとして、『引導作法』でもっとも重視される血脈と秘印明は、阿闍梨から弟子、導師から亡者へと継承される即身成仏の秘密の印璽であり、導師は亡者が即身成仏するのだという確かな信念をもつように求められていることが、その注釈書で主張されていた。

「もとより引導法の経軌というものはない」⁽²⁴⁾の⁽²⁴⁾ではあるが、依るべき典拠がないのではなく、『引導作法』の印明・経文の出典傾向を伺うことによって、その基盤思想が阿部大経を中心として成立していることが改めて理解できたと思う。

さらに『引導作法』の内容を理解するためには、その注釈書を見なければならぬ。『引導作法』において重要な鍵語となっているのは「生仏不二」という観念であるが、すでに紙幅が尽きたので、また稿を改めて論じた。

『作法集』所収『引導作法』の基礎

基本資料

- ・ 寛饒（一〇九五）『引導大事（引導秘法）』『興教大師全集』（下）宝仙寺、昭和十年
 - ・ 寛饒『引導次第』『興教大師全集』（一卷本）加持世界社、明治四十二年
 - ・ 総本山智積院『作法集』昭和三年（昭和五十四年改訂四版）
 - ・ 総本山智積院『出家受戒作法』昭和五二年
 - ・ 総本山智積院『伝法灌頂諸法集』昭和四六年（平成一六年改訂六版）
 - ・ 智興（二七六）『引導作法』智山書庫・二七棚三五箱一番、玄瑜（八五六）本
 - ・ 動潮（七〇九）伝『諸切紙口決』『智山全書』第九卷、智山全書刊行会、昭和四十年
 - ・ 南山乞士不可停（一六六）『福田殖種纂要』『第八・引導作法部』所収「十六・引導作法」。智山書庫・二三棚七箱四番
 - ・ 隆誉（七五）『諸大事十結』宮野宥智校訂『加持祈禱真言秘密諸大事全集』松本日進堂、昭和二年（昭和四一年第六版）
 - ・ 隆誉『諸大事口決』智山書庫・二七棚二八箱一九番
- ※総本山智積院御内局の配慮により、智山書庫の資料については別院真福寺所蔵マイクロフィルムを使用することができた。ここに記して感謝いたします。

参考文献

- ・ 上田霊城「一九九〇」『改訂真言密教事相概説―諸尊法・灌頂

部―「下」（二〇〇八年改訂第一版）

- ・ 小宮俊海「二〇一七」『作法集』の成立の経緯「現代密教」第二八号
- ・ 佐藤隆彦「二〇一五」『引導作法の研究』『葬儀の意義』高野山真言宗布教研究所
- ・ 高井観海「一九五三」『密教事相大系』藤井佐兵衛
- ・ 田中悠文「二〇〇一」『作法集』を点検する（五）―葬送をめぐる諸作法①―『智山ジャーナル』第一五号、『作法集』を点検する（六）承前『智山ジャーナル』第一六号、『作法集』を点検する（七）―葬送をめぐる諸作法②―『引導作法』について―『智山ジャーナル』第一七号
- ・ 智山伝法院「二〇一〇」『智山の真言―常用經典における真言の解説―』智山伝法院選書一五、「二〇二二」『智山の真言②―金剛界念誦次第における真言の解説―』智山伝法院選書一六、「二〇二五」『智山の真言③―胎藏界念誦次第における真言の解説―』智山伝法院選書一七
- ・ 東京多摩教区智山青年会「二〇〇九」『二座勤修 滅罪儀礼に関する勉強会の聴書集―葬送儀礼―秘密引導作法』を中心に―
- ・ 梅尾祥雲「一九一二」『引導法の研究』（一）『六大新報』第四六〇号、（二）同、第四六一号、（三）同、第四六二号
- ・ 布施浄慧『作法集の研究』『仏教文化論集』川崎大師教学研究所紀要（一九七五、一九七七、一九八一）
- ・ 布施浄慧「二〇二二」『作法集伝授会 伝授録』智山青年連合会

※基本資料・参考文献の書き下しにあたっては現行通用の字体に改め現代仮名遣いとした。また異体字・略字・訓点も適宜改めた。

註

- (1) 『葬式仏教』に関する先行研究は枚挙にいとまがないが、古くは圭室諦成『葬式仏教』大法輪閣、一九六三がある。松尾剛次『葬式仏教の誕生』平凡社、二〇一一。智山勧学会編『近世の仏教 新義真言を中心として』青史出版、二〇一一、智山勧学会編『葬送儀礼と現代社会』青史出版、二〇一七を参照。
- (2) 上田霊城『一九九〇』四七七頁
- (3) 同書四七七～四七八頁
- (4) 佐藤隆彦『二〇一五』一四八頁
- (5) 寛文八年（一六六八）、寛政三年（一七九一）、文政四年（一八二二）、天保二年（一八三二）の触書で葬礼仏事の華美を禁止している。
- (6) 『葬送儀礼と現代社会』前掲書によれば、各宗の引導法・葬儀式の起源は曖昧で、おそらくは江戸中・後期以降に用いられるようになった法式を、近代以降に整理し制定したという経緯を持つ。天台宗『天台常用法儀集』（一九五八）、浄土宗『浄土法要集』（原型は『蓮門六時勤行式』一八五七年を基本として成立していったとされる）、曹洞宗『曹洞宗行持軌範』（一九六六、これは『洞上行持軌範』一八八九年発行に基づく）、日蓮宗『宗定日蓮宗法要式』（一九五一）
- (7) 小宮俊海『二〇一七』。また引導作法に関する研究論文として事相研究室編『引導作法』にみる密教儀礼の習俗化『現代密教』第六号（一九九三）
- (8) 総本山智積院『作法集』（上）所収。智山書庫所蔵写本に一本ある。『引導作法』（智山書庫・二七棚三五箱一番）
- (9) 智興：智山第十四世。字は法音。俗姓は雨森氏。在任は享保三―同一三年（一七六二）。
- (10) 智豊両山の留学僧の中には種々の事情によって中途下国する者（中下り・中上り）があった。当初、帰国中は在山年数に加えなかったが、元禄の頃からは代役料を納めて冬報恩講だけ出仕すれば、在山年数として算えられたため、単に冬報恩講だけ出仕する者も次第に多くなってくるという弊風を生じた。智興は豊山第十八世秀慶（一七五〇）と協議して、中下りの者も本山に代役料を納めて田舎談林所の報恩講に出仕すれば、在山と同格とする旨を発令して、代役料という便法を是認した。田舎談林所が整備され、地方で自立した活動が可能になり、中央での役務免除を金銭的条件つきで公認したのである。智興が智積院に登嶺した延宝四年（一六七六）頃から智積院直末許可の証文が量産されている。智興は享保四年（一七一九）に仁和寺・大覚寺に要請して新義真言宗僧への色衣の免許認可を受けている。次いで智興は秀慶と協議して、色衣に関する法令（色衣条目）

を諸国に発布した（真言宗智山派宗務庁『智山年表』〔近世篇〕二〇一四）。

(11) 高井観海「一九五三」九七〇頁

(12) 覚鑑『引導大事（引導秘法）』『興教大師全集』九〇五〜九〇六頁。覚鑑作とされるが、覚鑑著作目録にはなく、その資料の正当性は確証しがたい。奥書には「建長二年九月十八日法性寺禪定禪下高野參詣之時於御宿房奉授之 阿闍梨道範」とあることから、建長二年（一二五〇）までには成立したものか。また『五十通諸作法』中に「覚鑑上人引導大事」として収録される（興教大師伝記史料全集第二編史料、一二三三頁）。

(13) 『秘密引導作法（引導略作法、秘密引導略作法）』。動潮が洞泉律師から相伝した幸心相承の引導作法である。智山書庫にも何本か所蔵する（智山書庫・一七棚一八箱一〇番、一九棚七箱一六番、二七棚三四箱一番、三一棚一六箱三五番など）。

(14) 智山書庫所蔵の引導法として管見であるが、次のものがある。

①『真言宗引導抄』（智山書庫・一七棚二一箱四八番）、②『引導師用心秘事』（智山書庫・二九棚一六箱三番）、③『引導作法』（智山書庫・二九棚一六箱一〇番）。④『引導大事』（智山書庫・二九棚一一箱九番）。これらは現行の『引導作法』とは系統がかなり異なっており、様々な所伝があったことが知られる。

(15) 『諸大事十結』第九結には『引導大事』^通（『引導秘法』）、『臨終大事』^{附口伝}、『自心引導大事』、『為亡者行法事』、『光明真言七種印言』、『明恵上人七種印口伝』、『光明真言八葉印口伝』、『同破地獄曼荼羅』、『亡者曳覆曼荼羅』、『不動斷末魔大事』、『入魔除之大事』、『汚穢不淨除』^通、『墓焼留大事』、『焼分之大事』、『亡魂来留大事』、『墓所古廟移』、『葬送迹私作法』、『率都婆并位牌草案』を収める。

(16) 本表は石井祐聖真言宗豊山派事相研究所所長が平成三十年二月十六日に別院真福寺で開催された智山伝法院特別講習会「真言宗豊山派における『作法集』」特に引導作法を中心に「において配布された資料「智山派『作法集』と豊山派『作法集』の比較」に基づき、高野山の引導法を加えて表として示した。ここに記して感謝いたします。

(17) 高野『引導略作法』は大師御相承『引導作法（広）』の略本とされる。大師作とされる『引導作法（広）』の全文と解説は『真言宗実践双書』第一巻、大蔵舎、一九八一年を参照されたい。また『福田殖種纂要』第八・引導作法部所収「十六・引導作法」

(18) 『福田殖種纂要』第八・引導作法部所収「十七・引導略作法」

(19) 覚鑑『引導次第』『興教大師全集』五七八頁

(20) 中野達慧は、『御影供奉師表白』『無常導師表白』『引導次第』について、「此三部は声明集に今大師作とあるより、之れを全集本に収めたるも、古来の目録には著録されたるを見

ず。且つ其他にて今大師の御作と確む可き文献にも接せず、又造語等より考うるも、之れを今大師作とするには尚お研究を要す可し、謹て君子の示教を待つ」として、覚鑑の目錄に見られない点、覚鑑作と確証する文献がない点、文章表現の点から考えて覚鑑御作を疑っている。中野達慧「興教大師御撰述に対する書史学的研究 講式・表白・願文・密観に關して」『密教研究』第三五号、一九二九、六〇頁

(21) 真言宗豊山派発行『作法集』大正十三年初版・昭和二年版・昭和九年版・昭和四八年版・昭和五二年版・平成二年版・平成十六年・平成二五年版。また類本に豊山事相研究会編『小作法次第』所収の引導作法（昭和三十一年）がある。

(22) 本表は、石井祐聖師の前掲資料（2 伝法灌頂との比較）八頁（一〇頁）に基づき、『引導作法』と智山派所伝の「出家受戒作法」および「伝法灌頂作法」にはば相応する項目とを対照したものである。ここに記して感謝いたします。

(23) 『諸大事口決』第九結『引導大事』『次血脈秘印明等授之』

(24) 高井観海「一九五三」九七三頁

〈キーワード〉

作法集 引導作法 葬儀 伝法灌頂 出家受戒作法 両部大經